

甲子園ホテルの企画・設計理念の背景

—「利他」と「利己」をめぐる試論—

生活美学研究所 黒田 智子

はじめに—仮説と方法

昭和5年に完成した甲子園ホテルのシンボルマークは、打出の小槌である。打出の小槌は、現在も富や宝を生み出し願い事をかなえる不思議な力をもつとされる、いわゆる縁起物である。特に、大黒天がその右手に握っていることから、大黒天そのもの、または、大黒天の霊力の象徴と受け取られることがある。そして、ホテルが開業した昭和初期においては、大黒天は今以上に日本人の日常の暮らしに溶け込み親しまれていたことが、当時の生活文化から伺える。例えば大黒天は、藩札に止まらず維新後は日本銀行の紙幣にも描かれ、幕末から明治を経験した者には、世の中が変わっても依然として金銭に結びついた図像だった。また、引き札（広告・チラシ）には、恵比寿とともに、または七福神の一つとしても描かれ、衣食住に関わる日用品とも結びついてきた。しかも、人々は「甲子（きのえね）」の日を縁日として大黒天に参拝していたのだ。大黒天は、「甲子（きのえね）」とも結びついてきたのである。

甲子園ホテルの場合、ホテルが名称に冠する「甲子園」は、その内に「甲子」を含む。つまり、一般の人々は、甲子園ホテルに対してシンボルマークだけでなくホテルの名称からも、日々の御利益を願う対象としての大黒天を思い起しやすかったと考えられる。

一方、ホテル側にとって、打出の小槌をシンボルマークにすることは、広く人々に親しまれた縁起の良さの上に、経営成功の願いを重ね合わせることであったろう。ただし、甲子園ホテルには迎賓館としての役割がある以上、いわゆる大衆向けの気楽さとは趣の異なる雰囲気を提供する必要がある。ホテルの内部・外部にみられる格調高い装飾性は、それに応えるものとして工夫を重ね、考案されたのであろう。

特に、甲子園ホテルには、打出の小槌をモチーフとした抽象・具象による様々なバリエーションの建築装飾が、それぞれ特徴を持った空間の要所に配置されている¹⁾。例えば、宴会場だった現在の西ホールには、入り口の階段を下りてホールに立つまでの間にもそれを体験できる。（図1）しかも、建築装飾と空間構成の組み合わせは、ホテルに南面する池（大湯池 図2）と、周辺地域を含む広域的な関係の中に位置づけて、その意味を読み解くことが可能なのである。それによって、屋根、外壁、ホール、バンケットルームなど建築の内外に表現された、いわば「豊穡の水」についての物語の存在に気付くことになった²⁾。このような建築装飾と空間構成の組み合わせは他に類を見ず、甲子園ホテルの際立った特徴ではないかと思う。

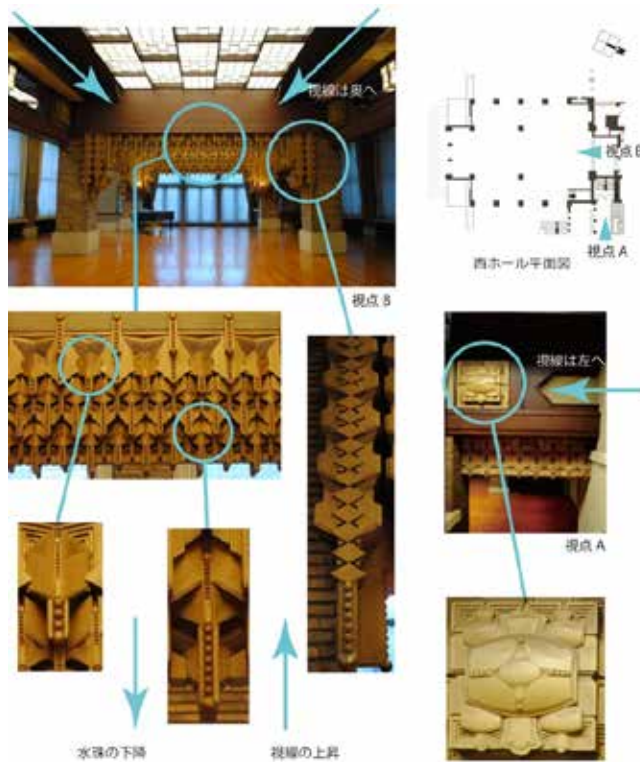


図1 西ホールにおける打出の小槌のバリエーションと視線および水珠の方向性

KOSHIEEN HOTEL

(Mid-way between Osaka and Kobe on Hanshin Highway)

KOSHIEEN HYOGOKEN JAPAN

■ OPENED APRIL 1938 ■

Eastern Charm
Western Convenience

Telephone: Nishinomiya 2115-30
Mail: P.O. Box 27-Nishinomiya
Cable address: "KOSHIEEN" Nishinomiya
Code: Bentley

Koshien Hotel is seen from the Hanshin Highway, set in a cool pine grove, across a crystal-clear lake. In the background rise the wooded hills of Rokko. The building itself is a gem of architectural beauty, and is fireproof, earthquake proof, and contains every modern convenience for the comfort of the guests.

Dining Room Service

<i>Table d'hôte</i>	
BREAKFAST	¥1.50
TIFFIN	2.00
DINNER	2.50

Average Room Tariff
Single room without bath ¥3.00
Double room with bath (for one) 5.00
Double room with bath (for two) 12.00
Suite with bath (Foreign or combination of Japanese and foreign style) ¥10.00

図2 開業当時のパンフレット(裏表紙)：南面する池(大湯池)から甲子園ホテルを望む

特に、「豊穰の水」の物語においては、ホテルから流れ出る水の恵み・豊かさがホテルの敷地内に留まらず、それらを超えて周辺地域に広がり注がれていることが注目される。そこに読み取れる豊穰の祈りは、当時の人々が打出の小槌や大黒天に寄せた御利益信仰とは方向性が異なっているからである。それは、御利益を自らのためのみに願う「利己」の祈りではなく、自らを超えて他のために願う「利他」の祈りである。逆に言えば、「利他」の祈りは、甲子園ホテルの設計理念の重要な基盤をなしていると推察されるのである。

そうであるならば、「利他」の祈りは、少なくとも企画・設計の中心となった、常務取締役兼支配人・林愛作(1873-1951)と建築家・遠藤新(1889-1951)の心中にあった大黒天や打出の小槌の意味や在り方と深く関わっているのではないだろうか。

そこで、本稿では、林と遠藤が打出の小槌または大黒天への「利他」の祈りをホテルの企画・設計の理念として共有し、建築装飾と空間構成の組み合わせによる建築表現の基盤とした、という仮説をとることとする。そして、その仮説を当時の生活文化や信仰の在り方に照らし、具体的な可能性について検討したい。

まず、「利己」と「利他」を視点に、大黒天信仰の変化を概観する。そして、甲子園ホテル開業当時、一般の日本人が日々の暮らしの中に持っていた打出の小槌および大黒天への信仰について文化史的視点から考察する。

次に、林と遠藤が甲子園ホテルに着手する以前、仏教、特に密教の教義に出会った可能性について検討する。二人が共にキリスト教徒であったことからすると、出会いの経緯は単純ではなく、しかも不可避的な理由があると推察される。本稿では、特に林に重点をおいて考察し、遠藤については機会を改めたい。林は、帝国ホテルで支配人として活躍する以前、10年近く勤務した山中商会ニューヨーク支店においてアーネスト・F・フェノロサ(1853-1908)と接する機会があった。「日本美術の恩人」として美術史上名高いフェノロサは、密教の宗派の一つである天台宗に帰依した仏教徒でもあった。そこで、当時のアメリカにおける日本美術ブームを背景に、林愛作のキリスト教徒としての考え方、それに影響を与えたと考えられるフェノロサの仏教徒としての考え方を、「利他」を視点として比較したい。

以上を踏まえて、甲子園ホテルから読み取れる「豊穰の水」の物語について再考することとする。

1. 昭和初期における大黒天と打出の小槌

1-1 大黒天信仰の変遷—「利他」から「利己」へ

大黒天は、元々は親しみ深いご利益信仰の対象ではなかった。古代インドにその原型が存在し、様々な変化を遂げてきたのだ。インドの戦いの神マハーカーラが、仏教を守護する護法善神となり、中国では大黒天と呼ばれ、平安時代、密教と共に日本に伝播した。この時、寺院の食料を約束し、福德・長寿などのご利益を担うようになったとされる。室町

時代頃から大国主命との習合が見られ、江戸時代には、ふくよかな体躯とにこやかな笑顔で右手に打出の小槌を握り、左肩に白い大きな袋を背負って俵の上に立つ、よく知られた姿となった。(本稿では、必要な場合は「大国天」を用いるが、それ以外の表記は「大黒天」に統一する。) 密教と共に渡来したとされる大黒天は、天台宗の場合、開祖である伝教大師最澄が、比叡山延暦寺の本堂(根本中堂)を開基するに際して感得したといわれる三面大黒天である。(図3) やはり、甲子(きのえね)を縁日とし、甲子会(きのえねえ)において「大黒天秘密供法要」を修している。(図4)

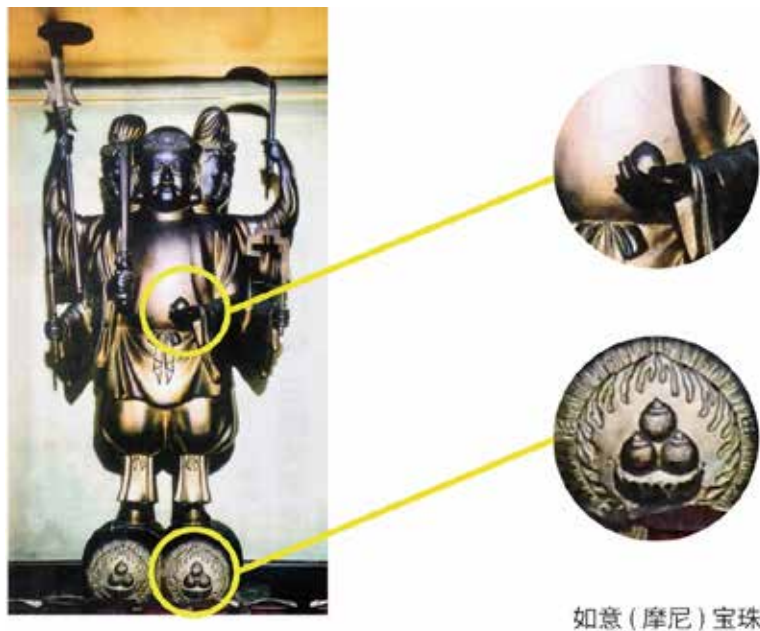


図3 比叡山三面大黒天：大黒天(正面)・弁財天(右)・毘沙門天(左)からなる



縁日の甲子会(きのえねえ)において「大黒天秘密供法要」を修している

図4 比叡山延暦寺大黒堂

三面大黒天の由来については、比叡山延暦寺発行の『比叡山三面大黒天縁起』に記されている³⁾。その中に、『妙法蓮華経』(以下、『法華経』)の中の「薬草喩品」の一節が引用されている。「薬草喩品」には、天地をめぐる壮大な水の循環を背景に、草木が育つ有様が語られている。本稿では、「薬草喩品」自体についての考察には入らない。しかしながら、甲子園ホテルの建築装飾と空間構成から読み取れる「豊穰の水」の物語と著しく類似がある事実を指摘しておきたい。その類似は、林と遠藤が、甲子園ホテル着手以前に天台密教と出会うだけでなく、ホテルの企画・設計の方針を決めるにあたり、大黒天信仰の源流に遡った可能性を示唆すると思う。そうであるならば、二人は、「比叡山三面大黒天縁起」や『法華経』の「薬草喩品」の存在を知り、内容に触れたと考えられる。

ところで、密教伝来以前から今日まで、日本の仏教は、大乘仏教である。大乘は、自己ではなく他者を利する「利他」を大前提とする。「利他」の祈りと実践こそが、自らの心身を救っていくのである。小乗(上座部)仏教が、自己の悟り、いわゆる魂の救済を第一の目的とすることとの基本的な違いである。また、仏教において護法善神とされる神々は、「利他」の祈りを行いに変え実践する人々を守護する。「天」は「大権現」と共に、「神」を意味するから、大黒天も同様の守護を本来とする。しかしながら、冒頭に触れたように昭和初期の大黒天は、祈願する人々自身のご利益つまり利己の祈りの対象となっていた。大黒天は、紙幣や生活用品と結びついて、それらに不自由のない暮らしを行えるようにと祈る対象となっていたのだ。祈りの転換期の特定は本稿の目的ではないが、少なくとも1200年の間に、大黒天への祈りは、他者のためつまり「利他」から、自己のためつまり「利己」へと方向が逆になっているのである。

甲子園ホテルが完成した1930年の日本は、明治維新から約60年を経ている。その間、戊辰戦争、西南戦争、日清戦争、日露戦争と国内外の戦争を体験し、翌年には満州事変が迫っていた。1945年以来戦争がない現在の日本とは、想像が難しいほど大きな隔たりがあると思う。富国強兵の国策により大国に2度勝利したとはいえ、一家の主や将来を嘱望された若者を失い、負傷者を抱えた家庭には、心的にも経済的にも辛く苦しい生活が待ち受けた。関東大震災をはじめとする災害や世界大恐慌に連鎖する不景気などを合わせて、多くの日本人が苦しみや不安の中で暮らしていたのだ。人間として、そこから抜け出したい、自らが助かりたい、つまり自らのご利益を願わないではいられないのも無理はないかもしれない。

一方、明治元年、新政府による神仏分離令(1868)により廃仏毀釈が行われ、仏教と神道が切り離された。仏教、特に密教においては、教義における根本的な世界観の変更を迫る歴史的法難として位置付けられるだろう。仏教における世界は、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天・声聞・縁覚・菩薩・如来の十界からなる。これらの世界は相互に接しており、最高の界はもちろん如来(仏)である。仏を中心に見た場合の調和と秩序ある世界は、金剛界・胎藏界の両曼荼羅に視覚化されている。神仏の分離は、本来の十界を天(神)と声聞(出家僧)の間で分断することを意味する。つまり、神とその下に位置する人間から

地獄までの6つの世界（六道）は、声聞から如来までの4つの世界と切り離されてしまったのである。

したがって、神である大黒天もまた、如来（仏）を含む上位4つの世界から切り離されたまま、1930年までに約60年が経っていたことになる。大黒天の場合、習合していた大国主命に重心が移動し、神道における「大国主命」として受け取られたことは、以上のような天界の隔絶からすると当然の成り行きかもしれない。

こうして、神として祀られていた大黒天は、明治以降、仏教とのつながりを失った。それは、仏教が持つ大乘利他の根本からの離脱を意味する。つまり、利他の実践を行うことを前提に大黒天がもたらしてきたはずの富や力などの御利益は、前提から切り離されたのである。それと並行して、人々の側では、神に向けての祈りから「利他」が忘れられ、結果として祈りの方向は、「利他」から「利己」へと変わっていったと捉えられる。

1-2 物語の中の打出の小槌と世俗的御利益—如意宝珠との関り

打出の小槌は、大黒天の持ち物であるに留まらず、日本各地に残る伝承の中に、鬼の持ち物や竜宮からの贈り物となって語り継がれてきた。また、『御伽草子』の一寸法師、『平家物語』の鬼、『宝物集』の鐘などとともに登場し、人々の夢や願いを象徴するものとして物語の中に読み継がれてきた。甲子園ホテルを訪れた人々は、打出の小槌をモチーフとする様々な建築装飾から、自らの心の中の打出の小槌へと記憶を辿り、共通の思い出や話題を通じて、懐かしさや楽しさを共有したかもしれない。その意味で建築装飾は、ホテルのサービスやホスピタリティの演出を担っていたといえるだろう。抽象・具象の打出の小槌の装飾の多様性が人々の目を楽しませて要所に配されていることにも合致する。

その楽しさは、「何でも願い事をかなえる」という打出の小槌の働きに集約されており、同時に、一見世俗的な御利益を一手に引き受けている。ただし、伝承・物語を問わず、打出の小槌を手にして、願い事をかなえる人は、身分の上下、年齢、仕事などを問わず、哀れみ深い、正直である、努力を怠らない、勇敢、腕力よりも知恵を働かすなど、人として何か優れた点がある。同時に、目覚ましい努力無しに、または、妬みなど悪意からの謀によって打出の小槌を手に入れた場合は、結局不幸な結果に落ち着く。近代に入り子供向けに書き直されたものは、勧善懲悪的な傾向が目立つようだ。

一方、『宝物集』の中で人々が語り合う宝比べでは、何でも願い事をかなえる打出の小槌は最高の宝ではないと判断される。それがもたらすのは、金銀財宝、長寿など現世利益つまり世俗における宝だけである。それらは、人を幸せにする反面、不幸にもするというのである。最高の宝は、現世利益を超えた仏教であるという結論である。この結論は、平安時代末期に書かれた仏教説話集であれば、当然と受け取れるかもしれない。

そこで、その理由つまり、仏教がなぜ最高の宝なのか、どの点で現世利益を超えているのかを明確にしておきたい。まず、「何でも願いがかなう」という打出の小槌の働き・特質に注目したい。仏教で同じ働きを表す図像の一つに、如意宝珠がある。打出の小槌の打面

部分などに如意宝珠が描かれるのは、それが表す働きの故と考えられる。日本最古といわれる三面大黒天の場合は、打出の小槌は持たず、左手に如意宝珠を持っていることが注目される。(図3)では、打出の小槌と、如意宝珠とがかなえる願いは、まったく同じなのであるか。

一般に、如意宝珠は、摩尼宝珠とも呼ばれる。そして摩尼宝珠は、どんなに穢れたところでも、それを置けば清らかになる。「どこでも浄める」という働きを持つのである。浄めといえば、僧侶の戒律つまり生活上の規則によるものがあげられ、神道でいう精進潔斎との共通性もあろう。しかしながらそれとは別に、密教では利他の実践、いわゆる徳積みが重要な浄めとされる。これは、身体だけでなく、心を浄めるがために重視されるのである。それによって、利己ゆえの世俗的な欲望や迷いを取り除き、それらが招き寄せる不幸の元を取り除き未然に防ぐ。それは、穢れた心の浄化であり魂の救済であり、生きながらにして極楽浄土の歓びをもたらすための大切な浄めとされる。しかも、その実践には、同時に世俗的な御利益がもたらされるというのである。利他の実践をする人を、護法の神々が守ることの具体的な顕れである。それこそが、打出の小槌または大黒天がかなえてくれる願い事の実現なのである。このように、現世利益を否定しているのではなく、それを包括して精神的にも物質的にも人を救っていくのが本来の仏教であるから、『宝物集』では、最高の宝とされるのだろう。そして、物心両面の救いが端的なのは、仏教の中でも特に密教であることを付け加えておきたい。

本稿では、以上のような打出の小槌や如意宝珠に関する知識や観念を、昭和初期の一般の日本人がどの程度もっていたかは明らかにしていない。少なくとも、林と遠藤は、相当の知識と理解を持ち、もし少しでも曖昧ならば、直ちに正しい意味や元の由来を確認しようとしたのではないかと思う。打出の小槌を迎賓館の主要な建築装飾のモチーフとするのであれば、国内外の賓客・要人に質問された場合には、確信をもって答えられる拠り所が必要だと考えるからである。そしてこのことは、林と遠藤が、日本最古の大黒天『比叡山三面大黒天縁起』を繙く十分な動機になっていると思う。従って、そこに記された偈文(詩句)から『法華経』の「薬草喩品」を参照した可能性があると思う。

1-3 上棟式における「槌打の行ない」—建設工事と「利他」

昭和初期の人々がしばしば打出の小槌を目にし、暮らしの中のハレの楽しみとしたものに、上棟式がある。遠藤新は、建築家として現場管理の責任上、地鎮祭や上棟式に参列することが多かったと思われる。一方、林愛作の場合は、施主としての参列に限定される。甲子園ホテル以前では、フランク・ロイド・ライト(1867-1959)の設計による自邸(現・電通八星苑、1917)、帝国ホテル(1923)など、数は決して多くない。しかしながら、両方ともに、帝国ホテル設計のためにライトを招聘するという、大きな決断の果てに立ち会うことになった祭式であった。特に帝国ホテルは規模も大きく、ライトの提案により設計だけでなく施工方法も前例の無いものになった。上棟式においては、これまでの工事の無事

に感謝するだけでなく、これからの無事も関係者一同と共に祈ったと想像される。特に、19歳で渡米しほぼ20年をアメリカで過ごした林にとっては、日本の伝統文化の再確認としても印象深かったかもしれない。

上棟式は、木造の場合、柱・梁などの軸組を組み上げ、棟木を乗せる時に行われる。土地の氏神、工匠の守護神、家屋の守護神へ、無事組みあがったことへの感謝、今後の工事の安全、そして完成後の建築の永遠が祈願される。古来建設には危険が伴い、完成した後も木造ゆえに火事が恐れられたし、地震や台風などに見舞われない保証はない。本来の意味・役割を尊び、鉄筋コンクリート造、鉄骨造の場合も、上棟式は木造の伝統に倣い、柱や壁などの構造体がほぼ出来あがった時に行われる。

例えば、大隅流の棟上げ式の場合、開式と閉式の間以下の次第がある。すべて、工事を行う工匠たちが演じ修める。なお、甲子園ホテルは大林組の施工によるが、何流で行われたかは確認できていない。祭式の内容については概ね共通すると考えられる。

- ① 塩湯の行ない
- ② 棟木運びの行ない
- ③ 綱引きの行ない
- ④ 奉幣の行ない
- ⑤ 弓矢の行ない
- ⑥ 工匠長誦文を奏す
- ⑦ 槌打の行ない
- ⑧ 散銭散餅の行ない
- ⑨ 工匠長拍手再拝
- ⑩ 棟木納め

⑧では、組みあがったばかりの軸組の下に近隣の人々も集まり、伝統に従って飾られた棟木から撒かれる餅（古銭を一緒に撒く場合もある）を、競って拾い合う。上棟式の最も華やかな場面だと思う。上棟式を内輪で済ますことが多くなった現在に比べ、昭和の初期までは、人々が共有するハレの場面として近隣の特別な楽しみだったと考えられる。祭りにおける直会同様、日常の暮らしの場に、歓びを分かち合うための空間が一時的に出現していたのだ。

そのクライマックスの直前に、⑦で木槌が用いられる。人々が棟木を見上げ注目する中、木槌が華々しく棟木に振り下ろされるのである（図5）。用いられる木槌は、長さが約80cmあり、大きさからすると「小槌」とは呼びにくい。しかしながら形状は共通し、遠目からはほぼ打出の小槌である。近世まで、槌は、建設だけでなく破壊の道具でもあった、戦争や火災では建物を打ち壊す。創造と破壊という働きの両面のうち、上棟式では、創造に永遠への願いを込め如意宝珠が描かれるとも受け取れる（図6）。木槌を棟木に打ち込むことによって、如意宝珠へ工匠たちの願いが伝わっていく。つまり、工事の安全と建築の永遠への祈りが、感謝と共に棟木から建物全体にいきわたり、建物を経て大地に伝わるので

ある。それを追って、さらに棟木から、同様に感謝と願いを込めてたくさんの餅が大地に向かって撒かれる。それは、参集した人々の手に喜びと共に拾われる。



図5 上棟式における槌打ちの行い

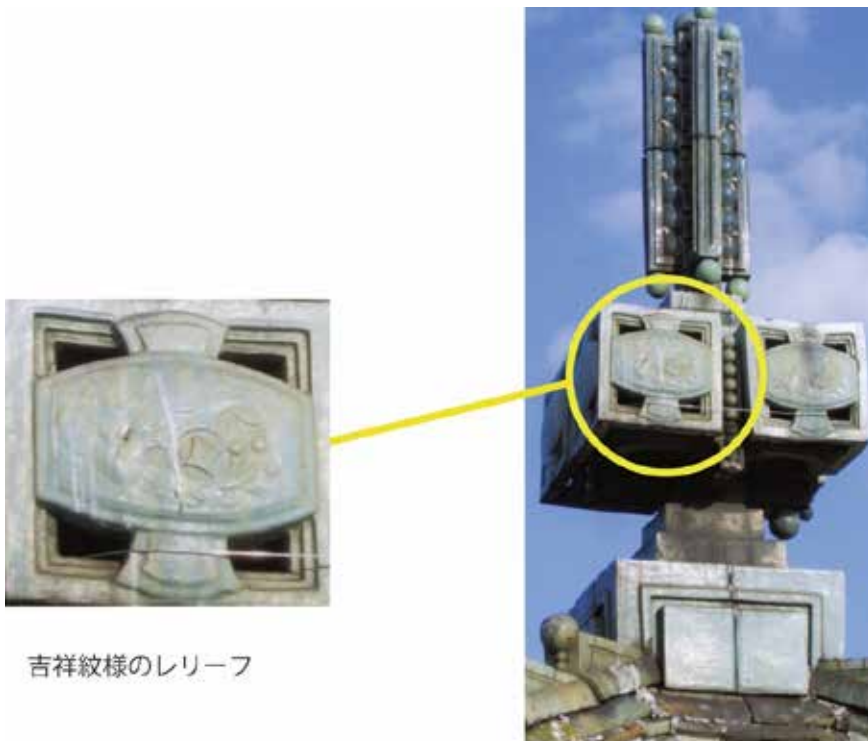


図6 上棟式に用いる木槌(大隅流)

ホテルを建設する側に立てば、⑧は、工事に関係する神だけでなく、周辺に住む人々にも受け取られ、喜ばれる、つまり「利他」の行いといえるだろう。

一方、甲子園ホテルの寄棟屋根の頂上にある棟飾は、1面に2ずつ、合計8つの打出の小槌のレリーフを持つ。掲載の写真からは判別がしにくいですが、さらにそれぞれの打出の小槌は、その中に宝尽くしの吉祥文様のレリーフを持つ(図7)。これらの吉祥文様は、交換納

札(千社札の一種)の上棟式の絵図に描かれた木槌と台に散りばめられた装飾との共通性が見られる(図8)。この絵は、1925(大正14)年に描かれたものである。ホテルの設計着手(1928)の時期に近接し注目される。



吉祥紋様のレリーフ

図7 甲子園ホテルの棟飾り



木槌と台に描かれた宝尽くしの吉祥紋様

図8 交換納札(千社札の一種、1925)に描かれた上棟式における木槌

また、棟飾りの打出の小槌は上棟式に屋根の頂上にみえた木槌のイメージと重なる。そして、落下する恵みの雨は、落下する数多くの餅と重なる。一時的な祭りに現れた視覚的

な記憶と共に人々に共有された喜びは、ホテル側の利他の願いと共に、恒久的に建築装飾に固定されたとも捉えられるだろう。そうであるならば、ホテルの屋根を見上げるたびに、ホテル経営側の人々、建設に関わる人々、周辺地域の人々は、共に分かち合った上棟式の喜びを思い出すように意図されているといえるのではないか。逆にいえば、屋根の頂上の棟飾りは、上棟式の喜びを思い出させる働き（機能）を持っているとも捉えられる。

また、寄棟屋根の稜線上の棟瓦には球体が連続し、あたかも棟飾りの打出の小槌(図9-A)から出た宝の珠が滑り落ちるようである(図9-B)。球体は、軒瓦、日華石の梁、さらに柱にも連続し、大地への落下直前の雨粒を表現したように見える(図9-C,D,E)。天からホテルの屋根、梁、壁、柱を伝って大地へ流れ落ちる雨は、台風による武庫川の氾濫など、かつて甲子園ホテルの周辺に襲い掛かった災害をもたらす雨ではない。天からの雨は、最も天に近いところにある棟飾の打出の小槌に触れて、地域の人々の願いである恵みの雨に変わるのである。冒頭に述べた「豊穡の水」の物語の一部である。何でも願い事をかなえる打出の小槌であれば、雨を素材にしたこのような物語の発想は十分ありうるだろう。そうであるならば、打出の小槌をモチーフとした装飾配置は、上棟式に一時的に顕れた「利他」を恒久的に表現することで、あたかも甲子園ホテルを「利他」の装置としているようにも捉えられる。

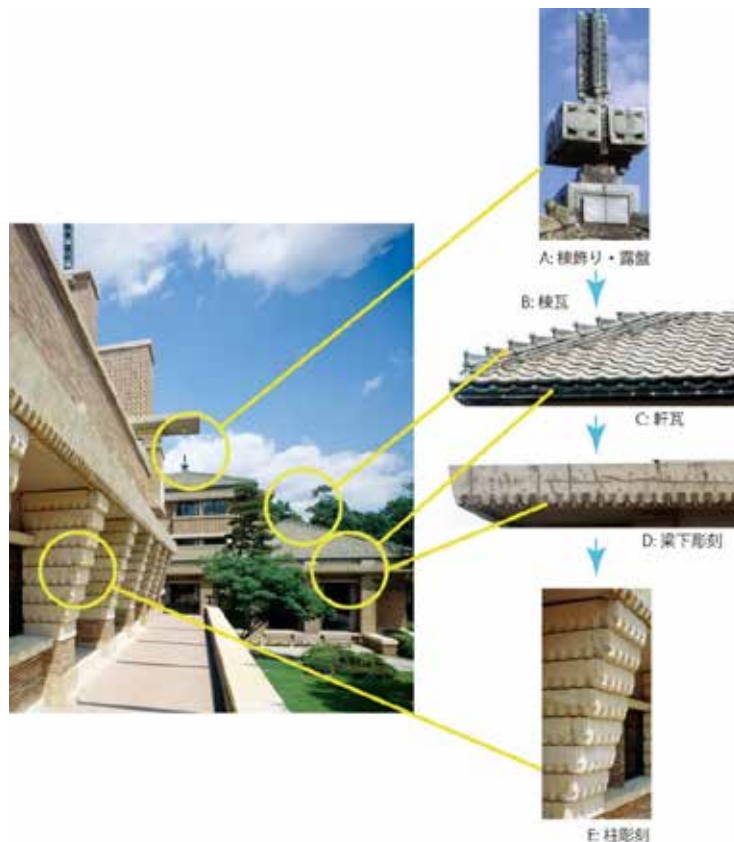


図9 空から大地へ：棟飾り(打出の小槌)を経た恵みの雨(水珠)の落下

ところで、建築工事に際しての儀式は、地鎮祭、上棟式、竣工式が主なものである。近年、他は省略しても地鎮祭だけは行う傾向がみられるという。それは、地鎮祭が儀式の中でも特別であることの証であろう。大地に大きな変化を及ぼすことを恐れ、慎み祈る行為は古代から世界中にみられる。したがって、甲子園ホテルの場合、もしも上棟式の意味を建築装飾や配置に表現としたのであれば、地鎮祭についても同様の考察が必要ではないだろうか。これまでに、遠藤の残した記述や林と遠藤で監修したと考えられるパンフレットなどから、空に向かって伸びる中央の2本の塔と建築装飾の関係を、天地と雲・雨の関係と対応して考察している⁴⁾。その結果を、地鎮祭の意味・内容との対比から読み解くことにより、打出の小槌や大黒天に関しても新たな発見が期待できるかもしれない。

2. 日本美術を介しての林愛作と密教

2-1 前提

これまでの考察から、林愛作と遠藤新は、甲子園ホテルを企画・設計するにあたり、打出の小槌や大黒天の元の意味に遡って明らかにしようとした可能性が強まったといえるだろう。しかしながら、仮にふたりが延暦寺の『比叡山三面大黒天縁起』や『法華経』を読んだとしても、そこから得たイメージをホテルの企画・設計の基盤に据えて具体化していくにはかなり強い意志や動機が必要だと思う。林と遠藤がキリスト教徒であったことからすると、そのような展開は不自然にすら感じられる。

また遠藤が、阪神電鉄側に甲子園ホテルの原案をプレゼンテーションしたのは、残された図面の日付が1928年9月10日⁵⁾であることからその頃と考えられる。原案の内容は、実際の建築とかなり違って基本設計に至る前のアイデア段階である。一方、工事開始は、着工図の日付から1929年5月28日⁶⁾頃と考えられる。つまりアイデア提示から着工まで8ヶ月、ホテル完成の1930年4月まで1年7ヶ月しかかかっていない。その間に微妙な地形を読み、予算、法規、構造、素材などの条件に応え、迎賓館として他に類のない空間と装飾を見事に完成させている。二人の間には、信頼関係というだけでは表現しきれない、建築についての具体的な考え方の共有があったのではないかと推察されるのである。

もちろん、帝国ホテルにおけるチーフ・アシスタントとしての経験から得た遠藤の設計力がなければ不可能だと思う。しかも遠藤は、ホテルの原案を提示する以前に、すでに芸術としての建築について自らの考えを「建築美術」(1926)、「建築論」(1926)として公に発表していた⁷⁾。それは、抽象的な芸術論ではなく、設計という実践を通じて遠藤自身が経験的に得た建築について考え方をまとめたものであった。その視点からすると、同時代の建築家の建築論に比べて高い完成度を示している⁸⁾ことも付記しておきたい。ライトの下からの独立後6年を経て甲子園ホテルの設計を受けた遠藤は、確固とした設計理念を持ち、その意味で妥協を許さない建築家となっていたといえる。

一方、林は、帝国ホテル始まって以来の辣腕支配人として知られた経歴を持ち、ホテル

の運営に精通していた。しかしながら、ライトによる新館完成目前に火事によって本館が消失、その責任を取り無念の辞職をした。それから5年を経て、阪神電鉄から依頼された新たな迎賓館については、帝国ホテルで果たせなかったアイデアの実現に相当の意欲を持ったであろう。したがって、普通に考えるとふたりの間には、より良いホテルを求めて議論する場面が多くなると想像される。しかし、議論を重ねては、1年7カ月後の完成は不可能であろう。そこには、二人がすでに共有していたはずの考え方、つまり、甲子園ホテルの企画・設計のための理念や方法の基盤をなす考え方が存在するはずである。

遠藤が甲子園ホテルの設計を手掛けることになったのは、常務取締役兼支配人に就任していた林の推挙による。その時、すでに林は、ホテルについてかなり明確なイメージをもって遠藤に設計を依頼したと考えられる。遠藤は、甲子園ホテル完成後、「私は林さんのホテルを設計しただけ⁹⁾」と述べているほどである。16歳年上で、帝国ホテル・甲子園ホテル共に施主側にあった林を立てたといえればそれまでかもしれない。しかしながら、社会のためにならないと自ら判断したことに対しては、徹底した批判精神を生涯失わなかった遠藤であれば、むしろ最大限の信頼と賛辞の言葉ではないかと思う。

そこで、本稿では、林に重点を置いて考察を試みたい。

2-2 日本美術についての研鑽—「世界のヤマナカ」での経験

甲子園ホテル常務取締役兼支配人に着任する以前の林愛作(図10)はどのような仕事をしてきたのだろうか。まず、林は、1909年から1922年までの14年間、帝国ホテルに勤務していた。取締役兼支配人として、欧米の宿泊客を満足させるに十分なサービスと合理的な経理・運営をかつてないバランスで両立させた。後に近代建築の巨匠に数えられるフランク・ロイド・ライトを帝国ホテルの設計者として日本に招聘し、ライト館として名高い歴史的傑作の実現に大きく貢献したことで知られる。



図10 林愛作

帝国ホテルの経営を軌道に乗せることは、取締役兼支配人としては一見当たり前にみえてしまう。しかしながら、それは、歴代の支配人が誰も為し得なかった快挙であった。帝国ホテルは、新生日本の近代化の証の一つとして1890（明治23）年、諸外国の貴賓や要人の宿泊のために開業した。林が着任する19年前のことである。日本の宿屋や旅館と違い、建築だけでなくその運営を含めホテルはヨーロッパの文化に根差す。もともと貴族の居館における来客のもてなしに起源があり、旅行者が増大した19世紀には、ホテル・リッツに代表されるグランドホテルが出現した。それは、帝国ホテルのモデルでもある。しかしながら、日本とは全く異なる生活文化に密接していることから、ホテル運営は日本人には難しかった。そのため、アメリカ人、ドイツ人、スイス人などが支配人を務めてきた。しかしながら、日本人スタッフに十分な指示を行うことは、彼らにもまた難しかったとみえる。やっと、開業から20年を経て後、外国人支配人がなしえなかった辣腕ぶりを、日本人である林が披歴したのである。

林の活躍は、ホテル内にとどまらず、自動車での送迎から、ゴルフ、乗馬、さらに観桜の会を立ち上げ、海外観光客の増加促進を目指し組織を設立するなど広範にわたった。来日する欧米人の生活様式に十分に対応した上で、日本の文化や自然に触れ存分に楽しむ機会を提供することに徹底したといえるだろう。新館建設に際し、林は同様の考え方でホテルを企画したと考えられる。

帝国ホテル時代の林の活躍は、持って生まれた才覚によるばかりでなく、アメリカでの長い生活経験が基盤になったと考えられる。林は、19歳で渡米し、1909年帰国するまでの約20年間をアメリカで過ごした。特に、1900年から1908年まで勤務¹⁰⁾したとされる山中商会での主任としての経験が注目される。アメリカ滞在の後半に位置する期間を、ニューヨークを拠点に世界を回り、欧米の収集家に日本の高価な美術骨董品を紹介・販売していた。（図11）社長である山中定次郎や仕事仲間との繋がりや、山中商会を退職した後も、少なくともアーネスト・フェノロサ（1853-1908）をめぐる継続したと考えられる。



図11 山中定次郎(中央)を囲むニューヨーク支店のスタッフ(後列右から2番目が林愛作)

もともと江戸時代から大阪で骨董品を扱っていた山中商会は、明治維新以降、大名家や寺院が手放なさざるを得なかった国宝級の美術工芸品を、海外の愛好家に売買して成功していた。やがて日清戦争(1894-95)の一方で日本がとった親米外交を追い風としてアメリカに進出し、1894(明治27)年、ニューヨークに仮店舗を出す(図12)。林が在籍した時期には、ニューヨーク以外にボストン、アトランティックシティ(富裕層の夏の保養地)、ロンドンに支店を開いていた。日本だけでなく中国からの美術品を扱い始め、「世界のヤマナカ」として高い評価を得つつあったのだ。



図12 山中商会ニューヨーク支店

上り坂の山中商会にあって、林は、欧米の富裕層の好みや生活文化に精通するとともに、世界の高級ホテルの宿泊経験を持つに至る。ホテルマンとしての経験がなかった林が、帝国ホテル支配人に抜擢され、前述のような快挙を遂げた大きな理由とされる。それは、林が山中商会で活躍していた証でもある。美術骨董商としての林の仕事は、何よりもまず、欧米の美術愛好家が納得できるように日本美術について説明ができることが前提であろう。このことについて、考えてみたい。

林が山中商会に勤務したころは、すでにヨーロッパのジャポニズムがアメリカに伝わり、日本美術ブームが起こっていた。仏像・仏画から漆器・浮世絵・盆栽まで異国情緒あふれる品々は、日本文化が生み出したものである。同時に元をたどれば仏教の教義(世界観・考え方)に負うところが大きい。したがって、仏教もまた興味や憧憬の対象になるのは自然なことだったと思う。禅をはじめ日本の仏教文化への関心がアメリカ社会の中に育まれる時期でもあった。林自身はキリスト教徒であったが、仏教の基本教義を嗜んで英語で話れるようになっておくことは、日本人として仕事上の信頼を得るために大切だったのでは

ないかと思う。

林が勤務した時期の山中商会には、アーネスト・フェノロサがしばしば出入りしていた。フェノロサは、日本美術の専門家として山中商会の裕福な顧客のアドヴァイザーを務めていたのだ。また、日本美術について欧米各地で講演をする際は、山中商会が後ろ盾となった。日本美術史の草創期にあつて、アメリカ人とはいえ数少ない権威ある専門家だったフェノロサは、林はもちろん、商会にとって重要な存在ではなかったかと思われる。

2-2 天台宗において得度受戒したフェノロサ

(1) 日本美術の根底にある密教

山中商会のような美術骨董商が、欧米の顧客からの信頼を得るために必要な能力は何かを、具体的に考えてみたい。まずは、顧客の好みを良く知って気に入られるような商品を選び、その魅力と価値を相手が納得し十分満足するように説明できることだろう。ヨーロッパを追って19世紀末にアメリカで流行した日本趣味は、欧米諸都市で開催される万国博覧会を通じてさらに愛好家を増やし20世紀を迎える。江戸時代の浮世絵、茶道具、装身具、さらには盆栽など伝統文化が生み出した品々が安価な日用品から高価な美術品まで広く注目されたという。その中で最高とされたのは、仏像・仏画であったと考えられる。

日本人は、どちらかといえば「えもいわれぬ」、「阿吽の呼吸」、など「いわぬが花」を盾に言葉による説明を避け、箱書きや由来で価値を裏付ける傾向がある。欧米人は、漢字や箱書きが読めないことも手伝ってか、一般的に美術品自体についての自らの直観とそれを裏付ける論理的な説明を好むようだ。したがって、美術商側は、仏像・仏画が、なぜそのような姿形であり、何を表現しているのかを相手が納得するように説明できなければならないのである。また、顧客の満足感をひきだすためには、相手の好みを尊重して共感を表わすことはもちろん、美術品への単なる知識だけでは不十分で、それに自らが注ぐ愛情や尊厳の心が必要ではないだろうか。

一方、日本の仏教美術は、世界の宗教美術と同様、その教義と密接している。そして、仏画・仏像は、言葉で語れない宗教上の内容的な内容を視覚表現によって伝達する役割をになう。特に、鎌倉時代に浄土真宗、日蓮宗、臨済宗など多くの仏教の元となった天台宗の場合は、真言宗と同様に密教であり、したがってその教義は「秘密」とされる。僧侶が一般の人々（在家）に話すことは、教義上、

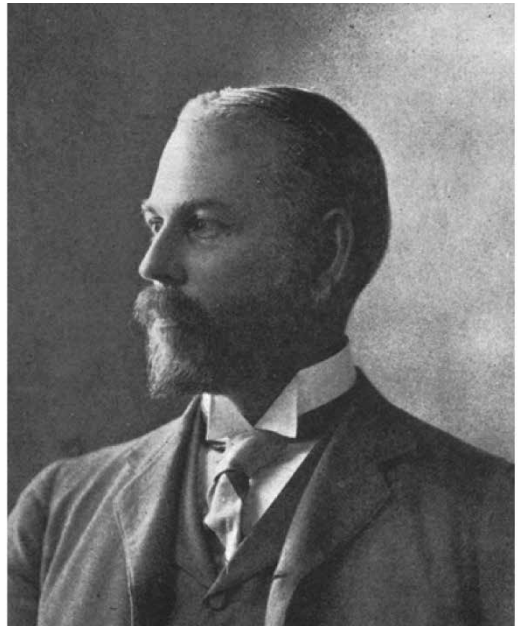


図13 アーネスト・F・フェノロサ

堅く禁じられているのだ。また、教義を知るにも段階があり、自ら積んだ修行によって伝授される内容は次第に深くなる。このような事情を考え併せ、仏教美術の権威として山中商会が信頼を置いていたのは、やはり、アーネスト・F・フェノロサ（1853-1908）だったと考えられる（図13）。アメリカ人のフェノロサは、日本美術についての盟友といえる岡倉天心（欧米では「覚三」を名乗ったが、本稿では「天心」に統一、1863-1913）以上に、アメリカの富裕な階層に通じてもいた。

フェノロサは、岡倉と共に、維新以降の廃仏毀釈により売買の対象となった日本の伝統美術の本来の価値を、講演や執筆活動によって広く国内外に紹介した。東京美術学校（現・東京芸術大学）設立の中心となり、日本国内の寺院の調査を行い、国の文化財の保護に道をつけた。この功績によりフェノロサは、日本美術史上、高い評価を得ている。同時に、フェノロサは、自らも日本の美術骨董品を収集し、富裕な愛好家に対して美術品を数多く紹介し、購入の便宜をはかっていた。フェノロサの収集活動は、日本国内の事情に通じた日本人美術商の支えなしには不可能であろう。実際、フェノロサは、日本滞在中から山中商会とのつながりがあった。1894年、山中商会がニューヨークに開業する際、援助を行ったひとりでもある。さらに1900年から亡くなる1908年までの間は、ニューヨーク支店において林愛作との交流があったと考えられるのである。

1908年にフェノロサがロンドンで急死した際、遺体をロンドンで火葬し、その遺骨を日本（滋賀県大津市）へ移送するために尽力した人々の中に林愛作もいた。生前フェノロサは、通称三井寺で知られる園城寺（山号：長等山、以下、三井寺）法明院に埋葬されることを遺言していたからである。フェノロサの墓は今も法明院にあり、人々を迎えている（図14）。



図14 アーネスト・F・フェノロサの墓：五輪塔の形式をとる（三井寺法明院）

さて、遺言実行のための尽力は、ビジネス上のつながりだけではなく、相応の信頼関係がなければありえないだろう。その後も、帝国ホテル支配人として林は、「斐諾洛薩(フェノロサ)先生碑」の建立の発起人となり、「フェノロサ氏記念会」を支援している。1928年、山中定次郎(山中商会社長)がフェノロサと後述のウィリアム・ビゲロウ追悼のために大茶会を開催した。生前縁の深かった一人として、林も参加したのではないと思われる。甲子園ホテルの設計が始まる頃であることが注目される。林は、山中商会退職後から少なくとも甲子園ホテル計画着手まで、フェノロサの生前の人脈を通じて、三井寺引いては天台宗と繋がっていた事実が見えてくる。

林は、フェノロサのように得度受戒はしなかったから、日本美術を説明する際に核心となる密教の教義をフェノロサように掴んではいなかったと考えられる。しかしながら、フェノロサの言葉と行動に触れ、自らも学び、密教の教義について相応の関心と知識を持っていたと推察されるのである。

(2) 得度受戒をめぐる人々

フェノロサと三井寺法明院との繋がりは、1885(明治18)年に遡る。この年、フェノロサは、元老院議員・町田久成(1838-1897)の東京にある別邸で、やはり日本美術品の収集家として著名なウィリアム・S・ビゲロウ(1850-1926)と共に、得度受戒したのである。その6日前には、すでに天心が得度受戒を果たしていた。それぞれ、諦信、月心、雷信の戒号を得ている。そして、その時の受戒者であった桜井敬徳(1834-1889)こそが、法明院阿闍梨であった。ビゲロウの墓もまた法明院にある。受戒者の寺院を自らの埋葬の地であり菩提寺とする決意は、フェノロサたちの得度受戒が形式的なものではなく、その精神生活に深く根差すものであった証と捉えられる。

とはいえ、本稿では、フェノロサの際立った功績のひとつが、伝統的な日本美術の紹介である事実に着目したい。母国アメリカでは、ボストン美術館のキュレーターを務め、精力的に多くの講演をこなし、美術愛好家の収集活動を支えた事実を重視したいのである。山中商会におけるフェノロサの役割はそれらの経験があったからこそ果たしたものだ。当然、フェノロサの扱った美術品の中には由緒ある寺院から出た仏像・仏画が数多く含まれた。そして、密教美術の場合は、秘密の教義に基づいた表現をとっている。欧米人に分かるように説明したいと思っても、その情報は、高い買値や通常の信頼関係では決して得ることができない。それは密教寺院の、目には見えない堅固な囲いの向こう側にあるのだ。その囲いを乗り越えるためには、世俗を離れて出家し、密教に帰依し僧侶となる以外に方法はない。このように見ていくと、フェノロサの密教による得度受戒を決定づけた動機は、魅了してやまない仏像・仏画の表現内容が、秘密の教義とどのように関連しているのかを知るところにあったことは疑いないことだと思う。

なお、フェノロサたちに得度受戒の場所として自らの別邸を提供した町田久成は、文化財保護の礎をつくったことで知られ、日本初の博物館構想を実現して帝室博物館の初代館長を務めた。フェノロサたちの2年前にやはり桜井敬徳により受戒、農商務省に勤務後は、

三井寺光浄院住職として晩年を過ごした。桜井敬徳は他にも政治家で書家でもあった副島種臣（1828-1905）、鑑画会でフェノロサを支援した河瀬秀治（1840-1928）などに受戒している。一般社会の要職に在りながら、日本の伝統美を通じて、密教の精神性に触れようとする人々は、日本人の中にも存在していたといえるだろう。

このうち、町田久成は、1894年のシカゴにおける万国宗教会議に三井寺光浄院住職として参加している。この会議はシカゴ万国博覧会（コロンブスのアメリカ大陸発見 400 年を記念しておりシカゴ・コロンブス万国博覧会ともいう、1893）に合わせて同時開催され、キリスト教をはじめ世界の宗教家が参加した。日本の仏教界からは臨済宗、浄土真宗、真言宗、天台宗などの僧侶が講演した。この時、初めて日本の仏教は大乗仏教であることが、世界に向かって宣説されたという。同時に、シカゴ万博は、アメリカにおける日本美術ブームに拍車をかける大きな要因になった。ここでは、その万博開催中に、日本美術の根本に深く関与する大乗仏教紹介の国際的な場が持たれ、諸宗派による参加があったことを指摘しておきたい。

ところで、桜井敬徳は、受戒以外にも、人々の求めに応じ、奈良・京都の古刹や日光を案内したという。密教の教義に基づいた仏像や建築の意味を、海外の要人にも、分りやすく正しい説明を行ったことであろう。たとえば、日光東照宮は天海僧正による山王一実神道で祀られている。神仏の関係は天台宗に依るため、阿闍梨であった敬徳ならではの本質に沿った説明だったと考えられる。また、宇治の平等院は、天台宗と浄土宗の併合による寺院である。したがって、敬徳が案内した可能性は十分にあるだろう。

桜井は 1889 年に亡くなっているため、1909 年に帝国ホテルに着任した林が生前日本で出会った可能性は低いと思う。しかし、桜井の日光、京都、奈良における伝統的建築の案内と解説は言説として残され、弟子たちに引き継がれた可能性がある。一方、林は辣腕支配人として、当然、欧米人が好む観光名所の日本建築について、自ら説明できるように基本的な意味を押さえておこうと考えたと思う。それは、林が新支配人として帯びた大いなる使命、つまり新帝国ホテルの建設にむけて、伝統的な日本建築そのものへの関心とも重なったと考えられる。林の山中商会から帝国ホテルへの転職は、密教美術については、仏像・仏画から寺院建築への対象の拡大でもあったのではないだろうか。

なお、林愛作が帝国ホテルの設計を依頼したフランク・ロイド・ライトは、前述のシカゴ博覧会で日本館鳳凰殿（図 15）を見て強い影響を受けたとされる。鳳凰殿は、海外の万国博覧会で日本が初めて建設した本格的な木造建築で、宇治の平等院鳳凰堂（図 16）をモデルのひとつとする。その後、ライトは 1905 年に初来日して以来、日光や京都を訪ねる一方で大量の浮世絵を購入した。ライト自身、浮世絵の収集家として著名である。そんなライトの収集の成果をアメリカで心待ちにする人々が属するのは、日本美術と仏教に興味や憧れを持つ富裕層なのである。それは、まさに林の活動基盤でもあったことを指摘しておきたい。



A 池からみた鳳凰殿正面

B 中州に建つ鳳凰殿

図 15 シカゴ万国博覧会(コロンブス世界博覧会、1893)会場に建つ日本館鳳凰殿



A 阿弥陀池から西の景観

B 宇治川・阿弥陀池・鳳凰堂の位置関係

図 16 平等院鳳凰堂



図 17 移築後の帝国ホテル：玄関部分と前池のみ残るが、もとは両側に客室棟、奥に宴会場・劇場があった。(愛知県犬山市明治村)

また、ライトが巨匠の腕を振るい遠藤が支えた帝国ホテル（図 17）は、平等院をモデルとするとされる。それはライトを設計者に選んだ林がすでに持っていた着想だったといわれている。甲子園ホテルとの関係の有無などは、今後の課題である。

2-3 「利他」を視点とするキリスト教

フェノロサと天心の得度受戒は、秘仏とされた法隆寺の救世観音像を政府の命で二人が開扉した翌年である。目にした仏像への感動は、その時受けた僧侶の激しい抵抗と共にフェノロサ自身が記しており著名である。この場合、仏像を、価値ある美術品として大切に保存していくことが調査による開扉の理由である。一方、その美を育み伝えてきた本来の宗教・信仰という視点からは、仏像はあばかれ、明らかに粗末に扱われている。仏教美術をそれを生み出した仏教と共に大切に捉えるなら、この経験から、フェノロサが「秘仏」の意味と共に仏教を深く理解したいと願うに至るのは自然かもしれない。

一方、明治から大正期にかけて、欧米の日本美術ブームの中で、美術品の止まることの無い海外流出に仕事の現場で立ち会った林愛作が、それをどのように感じていたのかを考察したい。山中商会に勤務する前、林は、マサチューセッツ州にあるクリスチャンの男子校で学んだ。創始者であり著名な伝道師であった D. L. ムーディは、現役の校長を務めていた。林は、ムーディに以下のような手紙を書いている。

「私は無益な高望みはせず、実業の道に進みたいと思っています。それは富を追求したいためではありません。我が国が強くて誠実なキリスト教徒のビジネスマンを必要としているからです。私は言葉によって立つのではなく、行為によって立つビジネスマンでありたいのです。もし、私の生き方が、一握りの地の塩であり光であることが証明されるならば、私は幸せを感じるでしょうし、見えない手で遠くから私たちを守ってくださるわれらが父に感謝します¹¹⁾。」

林は、ビジネスマンとして身を立てることを第一としている。また、キリスト教徒として強い意志をもって誠実に生きることを希望している。同時にそれは、自らの富を得るのではなく、日本人として祖国のために働くことであるという。キリスト教徒である林にとっての「利他」の内容が明確に読み取れる部分である。さらに、言葉ではなく実践への意志が示されている。「利他」の実践という点では仏教と共通であろう。それは山中商会における仕事ぶりに示されたと考えられる。そのような観点からすると、林にとって日本の美術品は、海外流出を憂うことより、まずはそれを欲して止まない顧客に正しく紹介し説明して外貨を獲得するための価値ある商品であったと考えられる。それを誠実に売買することが祖国日本のためであると同時に、林にとっての喜びであり誇りだったのではないかと想像される。

林は、幼少期をアメリカで過ごしたわけではない。群馬県に生まれ。前述のように横浜から渡米するまで日本で成長し 10 代を過ごした。苦学の経験があり、東京では第一高等学校（旧制高等学校、現在の東京大学の前身）に 1 年半ほど学んだという。当時、帝国大学

への登竜門である第一高等学校に進学することは、一般の人々にはできない特別なことだった。漢字を含む日本語の読み書きをはじめ、日本の歴史・文化についての一般教養は、日本人として非常に高い水準にあったと考えられる。当然、いわゆる「日本通の外国人」とは比べ物にならなかったであろう。また、林が残した日記は、日本語と英語の両方が用いられている。その中には、日本の古典文学や古代の歴史に対する深い造詣が示されている。折々の思いを和歌に託し数多く詠んでもいる。19才からの長い滞米生活の一方で、日本文化の教養が、知識だけでなく感性の上でも深く身につけていた証であろう。したがって、フェノロサがアメリカにおいて仏像・仏画を解釈する際、林は質問や議論の相手としての格好の条件を揃えていたといえる。

林が勤務していた頃の山中商会には、ボストン美術館からも岡倉天心が出入りしていた。しかしながら、盟友だったフェノロサと岡倉は晩年交際を断っていたとされる。そうであるならば、林の貢献の機会は少なくなかったのではないだろうか。相互に利すべき他者であったと考えられる。

林は、渡米するまでに横浜のアメリカ人宣教師のもとでキリスト教に入信していた。教会を拠点とするキリスト教の社会活動は、仕事を求めて地方から都会に出てきた人々の生活の救済から、海外に渡航する人々の学校、仕事、住まいの便宜まで幅広かった。それだけでも、群馬から親戚を頼って出てきた著者を惹きつけるに充分であったと想像される。そして、明治以降、文明開化を目指した日本は、近代化と西洋化はほとんど同じ意味であるかのように欧米の文化を摂取した。貿易港である横浜は特にその機運に満ち、新しい仕事や情報を求める若者たちが、将来への夢を描いて地方から集結した。居留地には外国人が住み、英語をはじめとする外国語、西洋の服装、料理、街並み、店舗、家具などが異国情緒と活気を生み出した。キリスト教の教会もその中であって日本人の若者に海外への扉を開いていたのだ。林がアメリカに憧れ、その文化や社会の依って立つキリスト教に惹かれてキリスト教徒になったとすれば、フェノロサは、日本美術に魅了され深く理解したいがために天台密教において得度受戒したといえる。それが生きるすべに繋がっていた点でも、二人は国境や宗教を超えて共感するところがあったかもしれない。そうであるならば、その共感から発した二人が、商会の扱う優れた仏教美術を前に仏教の根本にふれ、それを共有することがあったとしても不自然ではないと思う。そしてその共有は、心の純粋な部分で相互に共鳴するものだったのではないだろうか。密教の「密」とは、語ることでできない秘密である。同時に、理論・理屈ではなく経験に依って培われた心を意味する。それはまた、内なる真実の心、つまり「まごころ」を意味するとされるからである。

3. 「利他」と廻向

3-1 敷地の選定

甲子園ホテルから読み取れる「豊穰の水」の物語では、まず、天からの雨が、ホテルの

建築装飾である打出の小槌に触れることで大黒天の霊力が込められる。そうして「豊穰の水」となった雨水は建物を伝い、ホテルに南面する大湯池に注ぐ。さらに「豊穰の水」は、大湯池に繋がる用水路を通じて周囲の田畑に注ぎ、豊作をもたらす。

そのような物語と対照的に、現実の甲子園ホテルの周辺地域は、かつて、武庫川の洪水と水不足という極端な水害のために、人々の生活が脅かされてきた長い歴史がある。水不足の場合は農作物をなんとかしてでも守ろうとし、村の間では水争いも行なわれた。そのため命を落とす人さえいたのである。

林愛作が甲子園ホテルの開業に向けて、阪神電鉄からホテルの企画と建設を任された頃は、水害対策に通りの解決がもたらされていた。その経緯を辿ると、まず、1922（大正11）年、武庫川の支流の枝川と申川を阪神電鉄が兵庫県から買いつつた。翌年、兵庫県は、その収入で、国道2号線の敷設と共に、武庫川河川の改修を行ったのである。改修によって、洪水被害は、かつてとは比べられないほど少なくなる。一方、阪神電鉄は、枝川と申川を廃川とした。天井川だった二つの川は、地盤が高いため良好な住宅地と見込まれ、新たな開発地となったのである。同時に、水源を失った地域のために別途、農業用水を保証する必要があったと考えられる。開発後にできる住宅地のために、新たに生活用水を準備する必要もあったであろう。武庫川と枝川の分岐点のそばに武庫川からの取水口として枝川樋門を設置したのは解決策のひとつだったと考えられる。それによって、低湿地として存在していた大湯池は水源地として必要な水量が常時確保されるようになったのである。1930年の開業に向け、甲子園ホテルは、大湯池を鳴尾村から年間500円で借り受け、宿泊客が舟遊びも楽しめる回遊式庭園の一部として改修した。枝川、申川、大湯池、甲子園ホテルの位置関係を、図18に示す。

廃川となった枝川と申川に分岐点には、すでに1924（大正13）年、甲子園大運動場（現・甲子園球場）が開設されていた。甲子園の名称は、この時、阪神電鉄の重役会議で決定したとされる。不況が続く中、前年の関東大震災によって帝都東京は壊滅状態となった。1924年は甲子（きのえね、十干十二支の最初）の年だったことなどから、経済再興と人心一新の願いを込めたのではないかと考えられる。そして、同じ名称が、6年後に武庫川と枝川に分岐点に位置する大湯池のそばに開業したホテルにも、新開発地にも用いられたのである。あたかも2つの分岐点にそれぞれ開発地の核を配置したように見える。（図18）しかしながら、最初電鉄側の想定していたホテルの候補地は、娯楽地として開発が進む海側にあった。社内関係者の座談会で、野田誠三（座談会当時社長）は、敷地選定の経緯を次のよう述べている。

「東京の専務をしていた林愛作という人が専務をやめておられたので、その人に白羽の矢をたて、読んできて計画を説明し、浜辺の候補地を見に行った。私も一緒に行ったが、林さんは“こんなところは珍しくない”というので上手の今のホテルのところへ行っった。ここは武庫川畔で松林も鬱蒼としており、前には池があり、結局ここに決まった¹²⁾。」

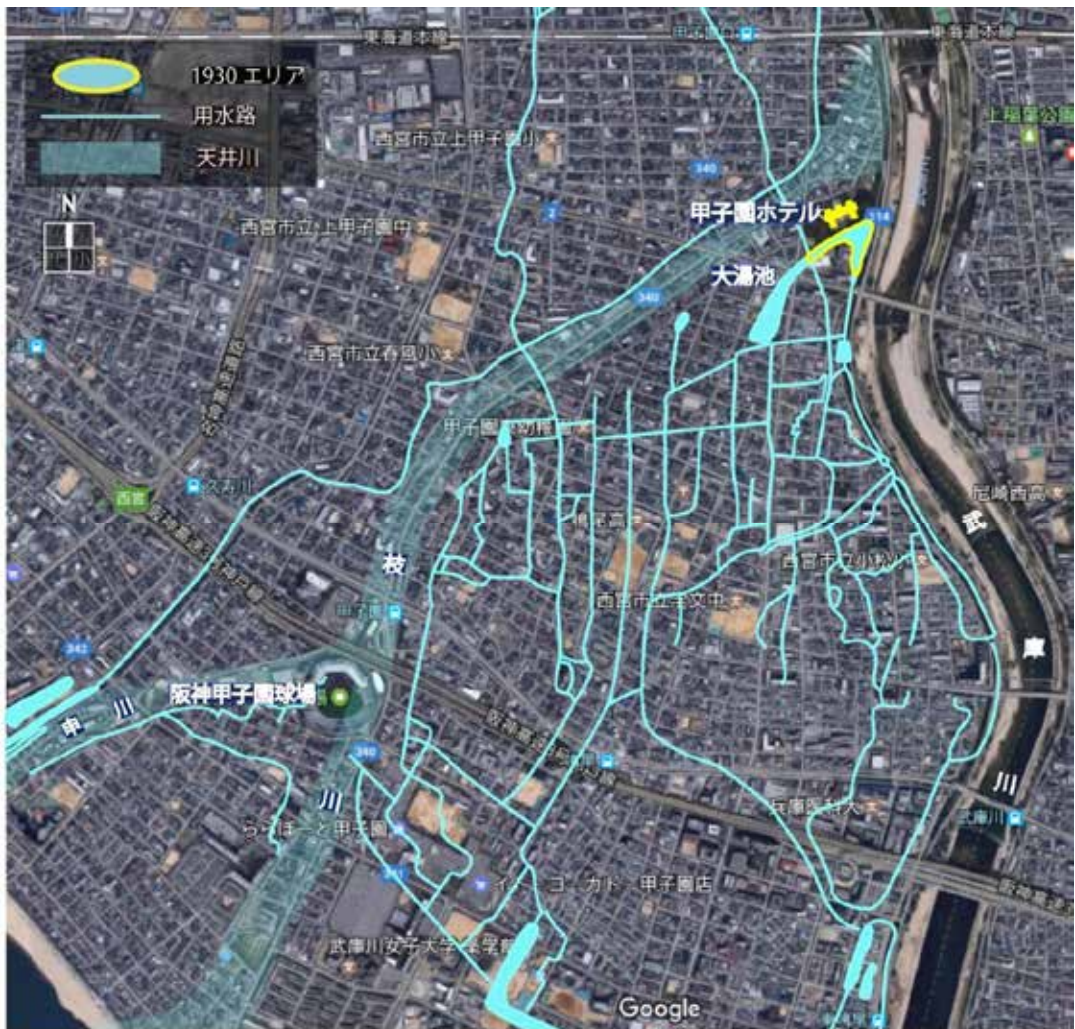


図 18 甲子園ホテルと大湯池・農業用水路・天井川的位置関係

帝国ホテルは、東京という日本最大の都市に位置していたにも関わらず、周囲から独立したひとつの都市として設計されたという。その帝国ホテルに対する「西の迎賓館」であれば、一般の人々で賑わう娯楽地から離し、独立した特別な場所につくるべきだと林が判断しても不思議ではないだろう。林が帝国ホテルのモデルとしたといわれる宇治の平等院鳳凰堂も宇治川畔の水辺にあるので、立地条件に共通性を見たのかもしれない。(図 16-B) 先に触れたように、平等院鳳凰堂が、シカゴ博覧会で注目された日本館鳳凰殿のモデルであった事実は、この時の林にとって、依然として重要だった可能性があるように思う。一方、武庫川と枝川の分岐点の鬱蒼とした松林には、海岸の明るいうりリゾート地とは対照的な暗さがある。新たな開発地に経済復興の夢を託す人々にとって、水害の歴史と共に負の雰囲気醸成場所と捉えられていたのかもしれない。

もちろん、阪神電鉄は二つの川の買収から間をおかず、林を招聘する以前から第一線の建築家や都市計画家に新開発地の計画案を依頼していた。1923 (大正 12) 年の一大文化村

計画（設楽貞雄）、1924（大正 13）年の甲子園花苑都市構想（大屋靈城）、1926（大正 15）年の甲子園大遊園計画（武田五一）などである。いずれも海側の開発であるため、新ホテルの位置も海側に位置する。欧米の近代都市計画を方向づけた田園都市の特徴を備えている一方で海辺まで続く景観を構成する既存の松林を活かす意図は読み取ることが難しい。

一方、遠藤新は、甲子園ホテル完成の年、ホテルの立地について、以下のように述べている。

「砂白く松緑なる武庫川岸、舟を浮かべるによろしき塘池を庭にしてはるかに海と山とを合わせたる風光¹³⁾」

鳴尾は、高砂、須磨などと共に、古くから松で知られ、謡曲にも登場する名所である。林や遠藤がホテルの企画・設計に着手した頃は白砂青松の伝統的な日本らしさを持った地域であった。遠藤は、それを大湯池と共に立地条件として大切に捉えていたのだ。

また、ホテル完成の 6 年前（ライトから独立した僅か 2 年後）に、自ら手掛けた住宅を 15 作品まとめて雑誌『婦人之友（1924. 5）』に発表し、設計の心構えについて次のように述べている。「まず地所をみる。地所が建築を教えてくれる いかにか生活が許されるか いかにか建築が許されるか¹⁴⁾」

自然と調和し敷地を活かす建築は、やはり日本の伝統である。そこから師ライトも多くを学んだとされる。遠藤自身、それをさらに甲子園ホテルの設計でも実践したと考えられる。

以上のことから、敷地を選定したのが林だとしても、両者ともに、真に日本の迎賓館にふさわしいホテルを実現するという理想をもって敷地周辺を見て回ったのではないかと思う。そして、近代化や田園都市に目が向けられる一方で、日本の伝統的な景観が忘れ去られることに対して、決して追従できないものを感じていたのではないだろうか。特に、山中商会で、本格的な日本の伝統美術を扱ってきた林であれば、伝統美を気につけない方が不自然だったかもしれない。

3-2 地所が教える建築

遠藤と林は、敷地周辺を歩いて、他にも時代から取り残され、忘れ去られる存在に気が付いたと想像される。それは、道端に残された小さな祠や石碑である。現在も、枝川周辺を歩けば、水争いで命を失った人々を祀る石碑を見ることができる。（図 19）実際に起こった悲しい出来事や、生きていくことが容易ではなかった時代の有様を、後の人々の記憶から拭い去ることが無いように、との思いが込められている。中には、何を記しているか、もはや読み取れない小さな石碑もある（図 20）。水害が厳しかった地域だけに、宅地開発以前は、もっとたくさんの碑が大小様々に存在したことだろう。新たな娯楽地や住宅地が建設され、敷設されて間もない国道を市電と共に自動車が走るような時代の転換期に、林や遠藤は、確かに立ち会っているという実感を持ったであろう。そして、忘れまいとして建てた碑さえもが、やがては放置され忘れ去られるであろう将来に深く心を痛めたのではないかと思われる。



鳴尾文化協会による説明の碑がそばに建つ

図 19 旧鳴尾村の義民碑(左：西宮市甲子園三番町 北郷公園内)



廃川となった「枝川」の文字が読み取れる



図 20 役割不明の小さな石碑(西宮市甲子園二番町 甲子園筋歩道)

林の場合は、苦勞して入学した名門・マウントハーモン校を途中で退学している。不眠症が理由とされるが、それは、一人寂しく異国アメリカで亡くなった友人の死に起因するという。林の「利他」の心は、孤独で寂しい心に寄り添う感受性と共にあったことを示していると思う。一方、遠藤は、福島県に生まれ、そこで少年時代を過ごした。東北地方の農村の厳しい現実を良く知っていた。成績優秀だった遠藤は、仙台第二高等学校、東京帝国大学と順調に進学・卒業を果たすが、地縁の支援あつてのことである。建築家として独立し家庭をもってからは、自分だけでなく妻の縁者の面倒も見た。遠藤の「利他」は、救いを求める者に手を差し伸べる優しさや温かさと共にあったと思う。

現在の航空写真に、大湯池改修以前の用水路を重ねてみた(図 18)。水利権は現在も生きているとも聞くので、林と遠藤が見た用水路は、これらに近いと考えてよいと思う。「地所が建築を教えてくれる」と記した遠藤であれば、水害の歴史に思いを馳せながら、水路が

めぐる田畑の間を歩いたのではないだろうか。そして、大湯池がもたらす農業用水は、田畑ともに、大小の碑や名もない祠を繋いでいることに心を向け、それらが訴え語る出来事に心耳を傾けたと思うのである。

そうであるならば、林と遠藤が共有したであろう甲子園ホテルの「豊穰の水」の物語において、大黒天の霊力は、田畑を潤すだけでなく、洪水や水不足で苦しみ、争いにより命まで落とした人々の心を慰め力づけている。それは、まさに廻向したと捉えることができるのではないだろうか。

同時に、林が平等院鳳凰堂をホテルのモデルと考えていたならば、「豊穰の水」による廻向は、いわゆる浄土式庭園の池に実践的な意味を与える着想として積極的に受け入れたと推察されるのである。そして、密教寺院の教義と救いの閉ざされた垣根を越えていくように、迎賓館の敷地の枠を超える「利他」の表現を持つことに喜びを感じたのではないだろうか。

仏教における廻向の考え方は、盂蘭盆会、施餓鬼供養、灯籠流しなど、季節を彩る日本の伝統的な生活文化でもある。もちろん、亡き人を悼む心は、キリスト教にもみられる。しかしながら、亡くなった人の魂をも救っていく廻向は、死後は天国か地獄かの二者択一のキリスト教と異なり、仏教に特有のものではないかと思う。昭和初期、旧鳴尾村周辺では、洪水や水争いで亡くなった人や、先に触れた日清・日露の戦争犠牲者への祈りを重ねた盂蘭盆会や水施餓鬼には、季節の風物詩というだけではない人々の想いが込められたであろう。キリスト教徒である二人は、この時、仏教にしかない廻向の考え方を選んで、「利他」における他者の枠を、この世を去った多くの人々へと広げたと捉えられるのではないだろうか。

3-3 林愛作と遠藤新の菩提寺

林愛作の墓は、鎌倉の光則寺（山号・行時山）にある。（図 21）キリスト教徒としての形式を選ばなかったことが注目される。群馬にある先祖の墓を移し、五輪塔とするところはフェノロサの墓と共有する。それを中央に配置し、自らの墓をその右側に建てている。光則寺は日蓮宗で、天台宗や真言宗などの密教寺院ではないから、密なる教えの枠はない。林が、密教そのものに踏み込むことは無かったと語っている様にも思う。



図 21 中央は林家先祖、向かって右は林愛作と夫人の墓

日蓮宗は、天台宗から出た鎌倉仏教の一つである。天台宗の所依の經典である『法華經』は日蓮宗においては、特別に重要である。「南無阿弥陀仏」ではなく「南無妙法蓮華經」と唱えることからもうかがえる。天台宗と同様に、大黒天を重要な護法善神としていることも注目される。光則寺の場合も、山門の軒下（寺側）に大黒天の彫刻がある。（図 22）晩年の林は、光則寺に足しげく通い、住職との語らいを大切にしていたという。そして、そのことが光則寺を菩提寺とすることにつながったという¹⁵⁾。



図 22 山門の寺側軒裏の大黒天(鎌倉市 光則寺)

遠藤新の墓は、東京・巣鴨の善照寺（山号・薬王山）にある（図 23）。遠藤もまたキリスト教徒としての墓を選ばなかった。善照寺は天台宗である。しかしながら、福島県の遠藤家は、天台宗ではなく曹洞宗であるという。このことは、遠藤が、天台宗と積極的に関わっていたことを示すものではないかと思う。しかしながら、墓石に戒名ではなく俗名つまり生前の名前がそのまま記されている（図 23）。善照寺の過去帳には、遠藤の戒名が記されており、寺側では準備していたことがわかる¹⁶⁾。墓にも形式的なことを忌避したといわれる遠藤の生き方が、徹底しているように思う。



側面に記された家族の名前



図 23 遠藤新の墓(東京都巣鴨 善照寺)

両者の墓と菩提寺の選択が、甲子園ホテルの企画・設計からどのくらい後だったのか、確認はできていない。林と遠藤の没年は、同じ1951(昭和26)年で、ホテル開業から21年が経過している。その間、日中戦争と第二次世界大戦があった。若い日にそれぞれが人生への扉を開いたアメリカは敵国として戦う相手となり、肉親や友人を失う経験をした。二人は甲子園ホテルの後、共に仕事をする事はなかった。しかし、アメリカ人社会やアメリカの生活文化に深くかかわった若い頃をそれぞれに思い起こし、平和と共に廻向の意味を大切に捉えたのではないかと思う。仏教において、亡き人に向けられる廻向の祈りは、怨親平等、つまり、敵味方の区別なく平等に向けられるからである。それは、水をめぐって争い命を落とした人々へ向けた祈りと同じ心から発しているのではないだろうか。

むすび

林愛作と遠藤新が、打出の小槌または大黒天への「利他」の祈りを甲子園ホテルの企画・設計の理念として共有し、装飾と空間構成の組み合わせによる建築表現の基盤としたという仮説に基づいて考察を進めた。生活文化における大黒天信仰と打出の小槌については、ふたりが天台密教における『比叡山三面大黒天縁起』や『法華経』の「薬草喻品」に遡った可能性が高まった。

上棟式を描いた当時の交換納札の絵図に描かれた木槌の装飾において、甲子園ホテルの棟飾における打出の小槌に浮彫りされた吉祥文様との明らかな類似が見出された。棟飾りの打出の小槌は、上棟式の槌の隠喩と考えられる。さらに、地鎮祭あつての上棟式であることから、建築全体について、新たに地鎮祭との関連による表現の可能性が示唆される。

続いて、キリスト教徒であった林愛作と天台密教の関わりについて考察した。帝国ホテル勤務以前の山中商会での経験において、日本美術の中でも特に仏像・仏画と密教教義との関係に触れた可能性を検討した。アーネスト・フェノロサとの出会をはじめ、フェノロサの得度受戒に関係した人々と林との関わりについても考察した。そこには、建築を含む密教美術の理解について、日米間の懸け橋となった桜井敬徳の存在が注目された。例えば、桜井による受戒の後、フェノロサに受戒の場を提供した町田久成は、シカゴ万国博覧会で開催された世界宗教者会議に参加した。これらの人々をめぐる人脈の存在が推察される。

また、シカゴ博において鳳凰殿をつぶさに見た可能性があるライトであれば、林が企画しライトが設計した帝国ホテルもまた、日本美術と密教の教義の關係に照らすと新たな発見があるのではないかと思う。フェノロサに受戒した桜井敬徳は天台宗の阿闍梨であり、日光や奈良・京都を求めに応じて案内した経歴がある。日光東照宮や宇治の平等院鳳凰堂はいずれも天台宗に關係する。それらは、ライトが参照しモデルにしたであろうといわれている。このことは、甲子園ホテルの企画・設計理念を明らかにする上でも必要ではないかと思う。

以上のような考察を踏まえて、甲子園ホテルに読み取れる「豊穰の水」の物語を再考す

ると、そこには新たに仏教における「廻向」の考え方が見出された。大湯池から打出の小槌の霊力を込めた水を運ぶ用水路は、田畑に豊かな実りを約束するだけではない。幾世代にもわたり農業に苦勞を重ね、あるいは水争いに命を落とした人々を廻向し、慰め、力づけている。このような水の表現が、極楽浄土を表現する平等院鳳凰堂に共通するのかどうかの検討は今後の課題である。

甲子園ホテルの企画・設計の背景を明らかにすることは、文化財としての建築の元の意味を知ることでもある。そのためには、旧鳴尾村をはじめ、林や遠藤が周辺地域に向けた眼差しを受け継ぎ、そこに見えてくるものと対話する必要があるのではないだろうか。それを通じて、この試論の誤りを正し、次世代に渡すにふさわしい成果を少しでも積み重ねていけたらと思う。

謝辞

仮説のもととなる「豊穰の水」の物語は、長年、生活環境学科の学生の皆さんとともに甲子園ホテルの調査に取り組む中で次第に確信に繋がりました。この活動は、実際の建築が大学の校舎として大切にされている事実が前提であり、甲子園会館庶務課の方々の支援があって継続したと思います。これまでの活動の成果が甲子プロジェクトの初年度の試論の基盤となったことに対して、深く感謝申し上げます。

また、ヒアリングと写真撮影・掲載を快く許諾下さった光則寺、善照寺、林裕美子氏、遠藤現氏に対し、感謝と共に心から御礼申し上げます。

遅筆につき、生活美学研究所の所員の皆さんには、忍耐強くお付き合いいただきました。心から感謝申し上げます。

【参考文献】

1. 比叡山延暦寺大黒堂 2016「比叡山三面大黒天縁起（案内パンフレット）」比叡山延暦寺
2. 水上文義 2011「比叡山と大黒天」『比叡山時報（2011. 4. 8）』 p. 4-5 比叡山延暦寺
3. 比叡山延暦寺坂本幸男・岩本裕（訳注）1962「菓草喩品」『法華経（上）（岩波文庫 33-304-1）』岩波書店
4. 鳥取県立博物館 1996『特別展 大国主と大黒天一福の神の誕生（図録）』鳥取県立博物館
5. 総本山比叡山延暦寺（監修）1997『天台宗法式作法—葬儀式・地鎮祭・上棟式・落慶式』四季社
6. 密教辞典編纂会・種智院大学密教学会内密教大辞典再出版委員会（編）2007『密教大辞典』法蔵館
7. 公益財団法人 竹中大工道具館 2017『祈りのかたち—知られざる建築儀式の世界』公益財団法人 竹中大工道具館
8. 武内孝夫 2003「林愛作ノート・I」『在 第13号』

9. 武内孝夫 2003 「林愛作ノート・II」『在 第 14 号』.
10. 武内孝夫 2004 「林愛作ノート・III」『在 第 15 号』
11. 武内孝夫 2004 「林愛作ノート・IV」『在 第 16 号』
12. 武内孝夫 2005 「林愛作ノート・V」『在 第 17 号』
13. 武内孝夫 2005 「林愛作ノート・VI」『在 第 18 号』.
14. 武内孝夫 2006 「林愛作ノート・VII」『在 第 20 号』
15. 武内孝夫 1997 『帝国ホテル物語』現代書館
16. 朽木ゆり子 2011 『ハウス・オブ・ヤマナカー東洋の至宝を欧米に売った美術商』新潮社、
17. 保坂清 1989 『フェノロサー「日本美術の恩人」の影の部分』河出書房新社
18. 山口静一 2012 『三井寺に眠るフェノロサとビゲロウの物語』宮帯出版社
19. 那須理香 2015 「1893 年シカゴ宗教会議における日本仏教代表 釈宗演の演説―近代仏教の観点から―」『日本語・日本学研究第 5 号 (2015)』p. 81-94 東京外国語大学国際日本研究センター
20. 山口由美 2000 『帝国ホテル・ライト館の謎―天才建築家と日本人たち』集英社新書
21. 谷川正己 2001 『フランク・ロイド・ライトとはだれか』王国社
22. 谷川正己 2004 『フランク・ロイド・ライトの日本―浮世絵に魅せられた「もう一つの顔」』光文社
23. 谷川正己 1977 『ライトと日本 (SD 選書 123)』鹿島出版会
24. 青田青蔵 (編) 2009 『遠藤新雑誌・新聞記事集成 (住宅建築文献集成 第 7 卷)』相模書房
25. 遠藤新 1924 「住宅小品 15 種―はしがき」『婦人之友 (1924. 5)』p. 2, 3 婦人之友社
26. 遠藤新 1930 「甲子園ホテルについて」『婦人之友 (1930. 6)』婦人之友社 p. 31-32
27. 遠藤新 1936 「甲子園ホテルの場合」『婦人之友 (1936. 9)』婦人之友社「庭」の頁 (頁番号なし)
28. 遠藤新 1926 「建築美術」『アルス大美術講座 第 6 卷』p. 1-23
29. 遠藤新 1926 『建築論』『アルス建築大講座 第 4 卷』(1928 発行) p. 3-23
30. 遠藤新建築創作所 1928. 9. 10 「甲子園ホテル原案」(タイトルの記載なし、推定) 武庫川女子大学甲子園会館所蔵
31. 遠藤新建築創作所 (設計者の記載なし、推定) 1929. 5. 28 「甲子園ホテル新築設計図」武庫川女子大学甲子園会館所蔵
32. 遠藤新建築創作所 1930. 4 (日付の記載なし、ホテル開業から推定) 「甲子園ホテル竣工図」武庫川女子大学甲子園会館所蔵
33. 遠藤新生誕百年事業委員会 2001 『建築家遠藤新 作品集』中央公論美術出版
34. 遠藤陶 「遠藤新物語 1-79」『福島建設工業新聞 (1992. 5. 17-1994. 12. 14)』福島工業新聞社

35. 土崎紀子・沢良子 1995『建築人物群像：追悼編/資料編』住まいの図書館出版局
36. 魚澄惣五郎 1960「西宮市史第二巻付図 第7図」『西宮市史 第2巻』西宮市役所
37. 日本経営史研究所 1985『阪神電気鉄道 80年史』凸版印刷
38. 鳴尾村誌編纂委員会 2005『鳴尾村誌 1889-1951』西宮市鳴尾区有財産管理委員会
39. 黒田智子 2017「建築の芸術性についての考察—遠藤新と野田俊彦による「建築論」の比較をめぐって」『日本建築学会近畿支部研究報告集 計画系 57』 p. 553-556
40. 黒田智子 2016「甲子園ホテルのシンボルマーク・打出の小槌の意図と背景—開業当時のパンフレットに着目して—」『武庫川女子大学生生活美学研究所紀要 第26号』 p. 129-150
41. 黒田智子 2014「甲子園ホテルの装飾の特質—打出の小槌に着目して」『日本建築学会近畿支部研究報告集 計画系 54』 p. 697-700
42. 辻真衣子、黒田智子 2010「甲子園ホテルにおける水の表現—西翼部装飾の特質」『日本建築学会近畿支部研究報告集 計画系』 p. 797-800

【注釈】

- 1) 参考文献 40
- 2) 参考文献 41
- 3) 参考文献 1
- 4) 参考文献 39
- 5) 参考文献 30 の日付による
- 6) 参考文献 31 の日付による
- 7) 参考文献 28、29
- 8) 参考文献 39
- 9) 参考文献 26、p. 31 上 1. 1
- 10) 参考文献 10、18
- 11) 参考文献 9、p. 36
- 12) 参考文献 37、p. 171
- 13) 参考文献 26、p. 32
- 14) 参考文献 25、p. 1
- 15) 林裕美子氏からのヒアリング (2016. 6. 24)
- 16) 善照寺でのヒアリングにおいて過去帳を閲覧 (2017. 3. 21)

【図出典】

- 図 1 平面図 (生活環境学科 3年 吉田紗彩作成) および写真 (筆者撮影) を用いて筆者作成
- 図 2 武庫川女子大学甲子園会館庶務課所蔵
- 図 3 写真 (参考文献 2 より) から筆者作成

図 4 筆者撮影

図 5 竹中大工道具館企画展「祈りのかたち—知られざる建築儀式の世界」において館内許可により筆者撮影 (2017. 5. 2)

図 6 写真 (図 4 に同じ) から筆者作成

図 7 写真 (武庫川女子大学広報室所蔵) から筆者作成

図 8 写真 (図 4 に同じ) から筆者作成

図 9 写真 (武庫川女子大学広報室所蔵) から筆者作成

図 10 http://www.yodoko.co.jp/geihinkan/g_library/inoue/endo/index1.html

図 11

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%8B%E3%83%A5%E3%83%BC%E3%83%A8%E3%83%BC%E3%82%AF%E5%B1%B1%E4%B8%AD%E5%95%86%E4%BC%9A>

図 12 <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%8B%E3%83%A5%E3%83%BC%E3%83%A8%E3%83%BC%E3%82%AF%E5%B1%B1%E4%B8%AD%E5%95%86%E4%BC%9A>

図 13 <http://oo24n.jp/today/43490296.html>

図 14 <https://www.shigabunka.net/archives/145>

図 15 <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%B3%B3%E5%87%B0%E6%AE%BF> の画像から筆者作成

図 16 A : http://geo.sgu.ac.jp/geo_essay/2010/62Uji/62_06.JPG の画像を筆者加工、
B : <http://ameblo.jp/ameba--pig/entry-10404639094.html> の画像を筆者加工

図 17 筆者撮影

図 18 大湯池・農業用水路・天井川の図(参考文献 36 より)と航空写真(Google Map/2017. 2. 2)および生活美学研究所前川多仁助手の描画をもとに、筆者作成

図 19 筆者撮影

図 20 筆者撮影

図 21 筆者撮影

図 22 筆者撮影

図 23 筆者撮影